

～豊かな心と確かな力 瞳輝く寒川の子～

## 寒川町立南小学校

研究テーマ：自分の考えを持つ・広げる・深める ～考えの“ずれ”を通して～

### 1 実践の目的

今年度は、「自分の考えを持つ・広げる・深める ～考えの“ずれ”を通して～」を研究テーマに実践を行った。昨年度、山梨大学准教授茅野政徳先生にご講演いただいた中で、児童が進んで話したくなるためには、話し合う必然性を教師側が意図的に作り上げることが必要、“ずれ”の起きる授業を行うこと、各学年の教材の系統性を意識しながら手立てを考えていくことをご指導いただいた。

そこで、今年度は考えを「持つ」ことに重点を置き、国語科の物語文で、子どもたちの考えの“ずれ”が生じる手立てを用いた。“ずれ”から生まれる「なぜ？」を話し合い、お互いの考えを共有し、考えを深められるようにしていくこととした。来年度は考えを「広げる」、再来年度は考えを「深める」につなげていき、目指す子どもの姿に近づけるよう研究していくこととした。今年度は、研究発表でこれまでの研究のま

### 2 実践の内容

(1) 研究授業・研究協議会の概要

年間で、各学年一回、研究授業を行った。

【1学期】

#### 3年「まいごのかぎ」

この話に続きがあるとしたら、りいこはかぎをどうしたのかを考えた。想像で書いてよいということを伝えたので、あまり悩むことなく書き始めている様子が見られた。

児童によって考えたことが違ったため、興味を持って意欲的に交流することができた。

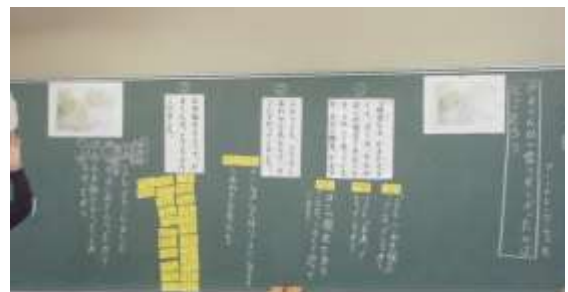
#### 4年「一つの花」

物語全般を通して、ゆみ子の幸福度を考えた。前時までに自分の考えを書き、教師側がそれに対するコメントを書くことで、話し合いに前向きな姿勢で取り組むことができた。同じ理由でも幸福度の違いがあったり、自分とは全く異なる側面から考えを書いていたりして、考えの相違に気付くことができた。

【2学期】

#### 2年「お手紙」

児童たちから選び出された選択肢を基に、がまくんの気持ちが大きく変わったところについて考えを持った。ほぼ全員が選択することができ、理由も書くことができていた。意見交流する場面では、名前マグネットが黒板に貼ってあることで、自分と同じ選択か違うかを確認し、活発に行っていた。



#### 5年「たすねびと」

綾の心情に影響を与えた人や物について考えた。普段の授業では、考えをなかなか持てず話し合いに参加することが難しい子で

も、「話を聞く」という選択権を与えることで、聞くことに集中し、良い意見を吸収しながら考えを持つことができた。話し合うことの楽しさも感じられ、話し合いの参加に選択権を与えることが「考えを持つ」ということに有効に働いた。

【3学期】

#### 1年「たぬきの糸車」

おかみさんとたぬきのどちらについて考えるか、選択させて授業を進めた。自分で選択したことにより、主体的に取り組む姿勢が見られた。全員の意見を板書することによって、友だちの意見がわかり、参考にして書くことができた。

#### 6年「海の命」

「太一はなぜクエをとらなかったのだろうか」という発問に対し、児童の考えを全体で共有しながら、ポイントとなる言葉に注目させるように教師が問い返していった。児童全員が同じ叙述に立ち返り、一つ一つの言葉の意味をよく考えることができた。多くの児童が振り返りに友達の意見を取り入れており、より深まった考えを書くことができた。



#### (2) 講演会について

山梨大学准教授の茅野政徳先生を招聘し、年3回講演会を開催した。講演会では、

- ① 物語の読み取りにおける3つの世界
- ② 授業における対話について
- ③ 登場人物の気持ちの変化
- ④ 教師のコメントカ

#### ⑤ 授業を参観する視点

について、研究授業の内容と具体的な物語教材を取り上げて、ご教授いただいた。

### 3 実践の成果

#### ①考えを持つための教師の手立てに関する授業実践

各学年で研究授業を行ったため、児童の発達段階に有効な手立て（選択肢から選ぶ、数値化やグラフ化する、児童が自分で参加の仕方を選ぶことのできる授業形態など）共有することができた。

#### ②子どもの姿で語る研究協議

授業者が事前に参観のポイントを伝え、協議を行う職員が同じ児童、グループを参観する形態を取り入れた。子どもの考えがどのように広がり、深まるのかという、見落としてしまいそうな変容に注目することができるようになり、具体的な児童の姿で研究協議を行うことができた。

### 4 今後の展開

#### ①安心して話し合いに取り組める子どもやクラスの土壌づくり

児童が自分の考えを安心して話すためには、一人ひとりが否定されない、認められていると感じられる雰囲気が必要不可欠である。そのためには、低学年から、友達と学習に取り組む良さや、対話の良さを感じられる機会を増やしていくことが必要である。

#### ②児童の対話の充実

話し合いがより充実することで、考えが広がり、深まることにつながっていく。そのためには、まず教師側が授業の中で行う対話の意図や目的を明確にし、子どもに伝える必要がある。児童が授業の中で「友達と話して得したな。」と感じる機会が増えることを目指していきたい。